

臨床研究の科学的専門集団の構築を目指す

九州大学大学院医学研究院 外科学講座腫瘍制御学分野

九州大学大学院 教授 片野 光男

夏の昼下がり、縁側の踏み石のあたりに莫塵を敷き、竹でできた赤や緑に染められた不揃いのビーズをつなぎ合わせたりして遊んでいる2歳の頃の自分をかなり良く記憶している。特に、緑色のビーズがお気に入りだったが、その感触や匂いも鮮明に憶えている。

そして、10歳の頃には、「こんなに沢山いる大人達が、どういふふうにして家族を養っていくことができるのだろう」「大人は、一人一人の仕事をどのようにして、この仕事はいくらというふうにお金に換算しているのだろう」という事が大きな関心事であり、私は到底、家族を支えるほどの金を手にするような不思議な大人にはなれないだろうと漠然と感じていた。特に、サラリーマンのような仕事がお金に変わる仕組みが非常に不思議であり、10歳の私にとっては、家庭を持った大人は、私の到底想像できないことをやってのけるスーパーマンであった。当然、父がどのようにしてわれわれを養っているのかは最大の関心事であった。一方、当時はそれ程懸命に生きてきているようにも思えない大人（私は寧ろこのような大人の人を通して花札など実に面白い遊びを手に入れることができた）もあり、そのような人も家族を持って生活している事が、何とも表現し難い安心感を抱かせ、親戚にこんな人がいたらなーとよく思ったものである。

高校生になってからは、将来の仕事を選択する

場面で大学進学からんで、「文科系・理科系」という選別が行われる事が不思議で、未だにその意味する所は良く理解できていない。たとえば、当時、政治や法律は文科系であり、医学は理科系というふうに分けられていた。ただ、私が今理解しつつあることは、敢えて分別せよというなら「理科系的思考をする人間と文科系的思考をする人間」が存在するという事、「他人の価値感にまで、かかわっていかざるを得ない仕事には、理科系・文科系で区別できない資質が必要になる場面が多い」ということである。ちなみに、敢えて「自分を分別して何曜日に扉の外に出せ」というなら、私の多くの局面は文科系的発想を基盤としているようだ。ともあれ、文科系・理科系という区別がよく理解できなかった（というよりは納得できなかった）ために、私が担任に出した進学希望は、法学部あるいは工学部であった。法学部を選んだのは、他の人による評価では、当時は「話上手」という点数が高く、法学部に進んで政治家になるのも良からうと考えたからであり、工学部は、繊維工学を学んで、自分の気に入った材料で気に入った服を着て過ごすのめがっかりいだろうといった風な考えが浮かんだからである。ところが、担任に呼ばれ、「文科系か理科系かぐらいははっきり決めて欲しい」と言われ、「自分が選択しようとしている仕事は果たして金銭の評価に耐えうるのだろうか、という10歳の時

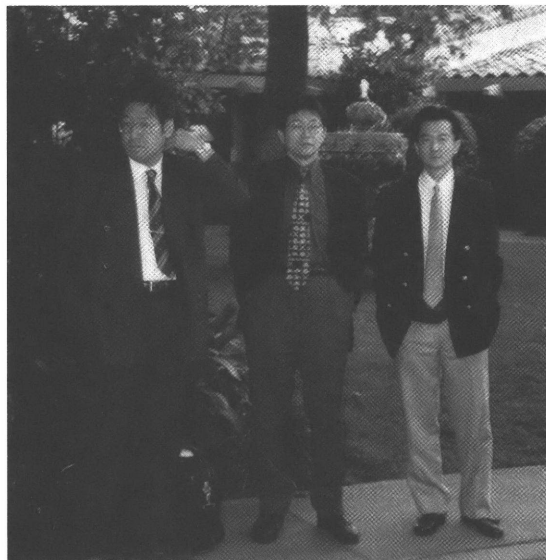


AACR出席前夜、近くの公園にて男4人でバーベキュー。

左：森崎隆君（現腫瘍制御学助手）

中：筆者

右：中村光成君（現NIH留学中）



AACR出席当日の朝、宿泊先にて。

左：森崎隆君

中：筆者

右：小島雅之君（現ジョンウェイブン癌研究所留学中）

からの疑問に加え、自分に合った仕事の選択さえ旨くいかないのではないかという不安も重なってきた」のを良く思い出す。

このような戸惑いの中で、愛する大人の代表である父が何かの折りに話した「お前達（兄と私）のどちらかが心を養う教育者に、もう一人が体を診る医者になったらよかろう」と言っていた言葉を頼りに医者としての道を選択した。というのも、8歳年上の兄は既に、教育者としての道を歩んでいた。実際この日まで、私には医者という選択肢はなかった。これが医者になったおおよその経過である。

ところで、2歳の時の緑色のビーズは何時思い出しても好ましいものであり、あの少し黒ずんだ緑は何物にも代え難い色彩ではあるが、今の私の周りにあの緑色を探し出すことは難しい。今は黒を基調にして服も家具も選んでいる。2歳から50歳までの自分を眺め気付いたことは、「2歳に時間を戻せば、あの黒ずんだ緑は宝の色であり、やは

り黒いビーズは好きにはなれそうにないが、時間を現在に戻すと、あの緑よりも遥かに黒に惹かれる」ということである。言葉を変えれば、「時は流れるが、流れ去ったのではなく蓄積してゆくのであり、心は変化するが、過去を切り捨てて移ろうのではなく、積み重なってゆくのだ」というほろ苦い実感である。

このような経過の中で、加齢を進歩あるいは成熟として捉えていくようになってきた。私にとっての進歩とは、「刻々と流れゆく事象を、川の流れるような連続したものとなるように組み込む作業であり、結果として、社会に向かって成熟（ゆったりとしてくる川の流れ）をよりはっきりと提示し、川全体を眺めた時、時間が蓄積している（共に川を形作っている）」という充足感を与えるものである」と考えている。

現在は、競争社会であり、科学は人の心や体をできるだけ細かく、できるだけ早く分解することを競っている。このような競争は確かに、「仕事は

どのようにして金銭という評価に変換してゆくのだろうか」という、私が10歳の頃から未だ解決のできていない疑問に対する一つの分かりやすい解答を突きつけている。すなわち「もっと細かく、早く、そして誰もが気が付いていない方法で分解する事が、最も高価な金銭に変換される仕事である」と。このような競争原理は、ここ数世紀の科学を現在の形に導くことには驚くほどの成果をもたらした。しかし、子供に花札の面白さを教えるような大人の存在する場所は急速に狭まっている。

この競争原理が進歩であるならば、ここ数世紀の競争原理が生み出した流れは人類が営々として蓄積してきた流れのどのあたりを形作っており、その流れを見た時、どれだけの人々が充足感を持って眺めているだろうか？ 特に、次の川の流れを作って行く若者達にとってどうなのであろうか？ 充足感を与えるような流れなのだろうか？ 私は今現在の競争原理と流れのスピードおよび方向を危惧しているが、批判するだけの材料は手にできずにいる。

医学に限って言えば、現在の医学研究の流れに、次のような流れを並行させたいと望んでいる。「人間を遺伝子レベルまで分解し、その分解作業を続ける研究集団の傍らで、分解作業中のパーツをより充足した人間に再構築してゆく補助作業である」。もしかしたら、現在の分解作業が終わったとき、その成果を組み立て直すだけで、人間としての充足感が得られるような進歩した結果になっているかもしれない。現時点においては、そうなる確立が高いと判断する人が多いであろう。そうであって欲しい。しかし、万が一、急速に細かく分解しすぎたために、それぞれの部品が組み合った時の意味を読み違え、人間に抱かずとも済んだような解決困難なストレスを生み出してしまうことも想定される。

私は、九州大学大学院医学系研究科（現・医学研究院）に新設された外科学講座腫瘍制御学を平成11年1月より担当することになった。外科を志

し九州大学第一外科（現在の臨床・腫瘍外科）に入局したが、当時は、手術することもなくベッドに横たわる癌性腹膜炎患者に表現し難い違和感を抱いたものだ。この違和感が裏返しとなってか（そうは考えたくないが）、癌性腹膜炎患者の治療法開発に研究生活の一步を踏み出すこととなった。その後、UCLA留学中は癌に対するヒトモノクローナル抗体の作成と臨床応用に携わり、再び、癌性腹膜炎治療に取り組む機会が与えられた。

今は、「癌性腹膜炎患者をしっかりと心で捉えた臨床研究分野の科学的専門集団の構築」を夢見ている。第一歩として、ほぼ同時期に新設された「医用工学」と共に「腫瘍工学」という看板を掲げ、臓器移植などの共存型医療に並ぶ、自己細胞や組織の再生・再利用による自立型医療の展開を始めた。癌性腹膜炎患者から目を逸らさず歩むことを望む若者は我々（九州大学大学院外科学講座腫瘍制御学分野）の所に集ってきて欲しい。

私は、2歳の頃から理屈っぽい。親は「懸命な子」だと言い、多くの方は「あまのじゃく」だと言い、友人は「面白い奴」と評価し、その他の人は「変な奴」と言う。どのような評価がより正解に近いのかは分からないが、50歳にもなって、同僚や後輩から発せられる「どうしたんですか？」と言われる質問の意味するところが解答に近いのかもしれない。彼らがしばしば怪訝そうに、そして少し哀れみの眼差しで発する質問というのは、「どうしたんだ、普通のスーツなんか着て」。「何言ってるやがる」と切り返したい所だが、そう言えば、かつてある教授に質問されたことがある「君一、白いシャツは持つとらんのかね」。